

日本学 研究

——日本学国际学术研讨会 论文集

中国人民大学外语系
日本九州产业大学国际文化学部

编

中国人民大学出版社

日本学

研究

——日本学国际学术研讨会
论文集

中国日本研究学会编
中国日本研究学会学术委员会编

（日）中国日本研究学会编

日本学研究

——日本学国际学术研讨会论文集

中国人民大学外语系 编
日本九州产业大学国际文化学部

中国人民大学出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本学研究——日本学国际学术研讨会论文集
中国人民大学外语系,
日本九州产业大学国际文化学部编.
北京: 中国人民大学出版社, 2001

ISBN 7-300-03754-2/G·784

I. 日…

II. ①中…②日…

III. 日本-研究-国际学术会议-文集

IV. K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2001) 第 19754 号

日本学研究

——日本学国际学术研讨会论文集

中国人民大学外语系 编
日本九州产业大学国际文化学部

出版发行: 中国人民大学出版社

(北京中关村大街 31 号 邮编 100080)

邮购部: 62515351 门市部: 62514148

总编室: 62511242 出版部: 62511239

E-mail: rendafx@public3.bta.net.cn

经 销: 新华书店

印 刷: 涿州市星河印刷厂

开本: 850×1168 毫米 1/32 印张: 8.875

2001 年 3 月第 1 版 2001 年 3 月第 1 次印刷

字数: 215 000

定价: 18.00 元

(图书出现印装问题, 本社负责调换)

産学一如

二〇〇〇年三月

九州産業大学長 山崎良也

基礎學術交流
促進中日友好

書文海

二〇〇〇.六.二五.

まえがき

「日本学国際シンポジウム」
記念论文集の刊行によせる

九州産業大学国際文化学部は、その名が示すように、現代社会のグローバル化に即応し真の国際人の育成を目指している。そのために世界各地の大学との国際交流の積極的な推進を重要な課題とし、特に九州という立地から、アジア地域との交流を重視している。アジアの中でも先ずは中国との交流を強く念願していたころ、本年七月三日、歴史上传統にすぐれ、国家的役割においても重要な貢献をしてきた、中国人民大学の外国語学部との間に、学部間交流協定が成立したことは、誠に喜びに堪えないところである。

このたびこの两大学の学部間交流協定の締結を記念し、同時に学术交流のスタートの第一歩として、共同開催による第一回日本学国際シンポジウムの企画が提案されたことに対し、極めて時宜を得た計画として、積極的な推進に協力し、準備を進めてきた。

中国人民大学外国語学部、特に日語教研室を中心とする多大の御盡力によって、十一月二十七日このシンポジウムが開催されたことは、誠に有意義なことであつた。当日われわれ国際文化学部から研究発表者として、阿満誠一助教授と石川泰成講師の二人をおくったが、大会の午前中は、北京大学の藤军博士、

中国人民大学の王志国教授、神戸大学の定延利之助教授に、さきの本学の二人を加えて、五人の研究発表がおこなわれた。午後は日本文化の代表的パフォーマンスとしての和服の着付けと、生花の実演がおこなわれたが、その多彩な内容によって多数の参加者を得たことは同慶の至りであり、日本文化の理解と日中文化交流に大きな成果をあげることができたと信じている。

その第一回「日本学国際シンポジウム」の成果を、広く内外の関係方面に提供するとともに、その意義を称揚するために記念論文集として刊行することになり、阿満、石川両氏の報告論文のほかに、朝元照雄、辛島美絵、小川哲哉、久保田優子、富吉建周の五氏の論文参加を果すことができた。これによって現代日本における諸学の学術研究の一端を紹介することができたと喜んでいる。

ともあれ、これを機会に今後さらに回を重ねることによって、両大学間の国際交流の発展と、日中両国の学術文化の研究と理解が深化充実することを心から期待する次第である。

最後に本シンポジウムの開催ならびに、記念論文集の刊行に、物心両面から甚大な努力と、配慮を頂いた中国人民大学外国語学部日語教研室の先生方に、深い敬意と謝意を表したい。

1999年12月20日

九州産業大学国際文化学部長

森田明

目 录

哲学・经济学・教育篇

滝沢克己における哲学と宗教	3	日本九州産業大学 富吉建周
産業の国際競争力に関する一考察——欧米・日本・アジアNIEs・中国・東南アジア	36	日本九州産業大学 朝元照雄
没有资本家的资本主义企业——浅论日本特色的企业制度	48	中国人民大学工商管理学院 杨杜
旧韓国に対する日本教育界の日本語教育論	55	日本九州産業大学 久保田優子
日本の文教政策と民間教育産業の役割	66	日本九州産業大学 小川哲哉

文化篇

传播与文化	79	中国人民大学 周建明
-------	----	------------

由纵式向网络式演变——日本社会结构和人际关系模式的变化趋势

84

北京邮电大学 左汉卿

吉野作造的中国论

96

中国人民大学外语系
陆华生

名字与文化——日本人名论述

106

中国人民大学外语系
李宗惠

中国佛教的禅宗与日本的临济宗

116

北京师范大学 宛金章

重视行为的语言文化和重视状态的语言文化

122

日本神户大学 定延利之

从语言表现看中日两国文化之差异

135

中国人民大学外语系
王志国

从汉字看中日文化交流

141

中国人民大学外语系
禹忠义

日本語の待遇表現と儒教文化
——日本語教育への提言

146

解放军信息工程大学
王鉄橋

文学篇

日本近现代文学全集与日本近现代文学史

163

北京师范大学外语系
王志松

《徒然草》与老庄思想

172

北京联合大学旅游学院
于春玲

- | | | |
|------------------|-----|-------------------|
| 短歌起源論議 | 177 | 北京联合大学旅游学院
王瑞林 |
| 中日汉诗交流与峨眉山良寛诗碑 | 186 | 高等教育出版社 尹学义 |
| 溪百年『經典余師』の訓読について | 190 | 日本九州産業大学
石川泰成 |

语言・教学篇

- | | | |
|-----------------------------|-----|--------------------|
| 从说话人的表达态度看句子主语 | 203 | 天津外国语学院 刘笑明 |
| 「～んです」の種々相 | 211 | 日本九州産業大学
阿満誠一 |
| 仮名文書の形容詞——特色ある
形容詞語彙について | 224 | 日本九州産業大学
辛島美絵 |
| 从汉语的新词语看日语的影响
——说“～屋” | 234 | 北京大学 彭广陆 |
| 日语文字体系的特点及文字教育
的重要性略谈 | 242 | 北京大学外国语学院日语系
潘钧 |
| 日本文化对语言知识教学的必要性 | 248 | 中央民族大学 曲延芳 |

難しい助詞の易しい教え方

255

清華大学 陆泽軍

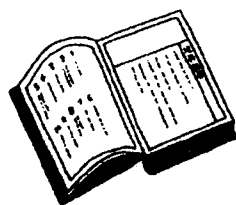
日语听力教学中应注意的问题

269

北京工商大学外语系
李春香

后 记

275



哲学·经济学·教育篇

滝沢克己における哲学と宗教

日本九州産業大学 富吉建周

(一)

昏迷を極めた現代の思想状況にあって、つまり「近代主義」のなかで躊躇するほかなすべを知らないそれにあって、哲学者滝沢克己の存在は際立つたものである。近・現代の哲学の根本的な欠陥である「近代主義」をつとに指摘し、デカルト的な「近代精神」^[1]に立ち帰ること、換言すれば、哲学の本来の問題である「自己そのもの」の問題を解明することを、幸にして西田哲学^[2]との格闘を通して哲学本来の対象に撞着しその問題を解決した立場より、機会あるごとに示唆し、従ってまた、現代の緊急な課題である、哲学と宗教^[3]との、仏教とキリスト教^[4]との、マルクス主義との実存主義^[5]との、神学と新約学^[6]との、哲学と科学と^[7]の対話に関して、人間存在の事実の根底からの理解を通して、つまり自己成立の事実の解明を通して、原理的にその可能性の道を掘鑿することができた。

その初期思想は、西田幾多郎（1870年—1945年）の哲学との取組とカール・バルト（1886年—1968年）のキリスト教神学との親炙と対決を通して形成され、専ら人間存在の成立構造つまり神と人間との根源的関係のダイナミックの解明に全力が傾注され、またその例証のために自己そのものの問題を問いつづ

けた作家夏目漱石（1867年—1916年）^[8]の文芸の批評がものされた。その中期思想は、その師西田幾多郎の死後、つまり戦後に始まる。R・デカルト、^[9]I・カント、^[10]S・キルケゴール、G・W・F・ヘーゲル、^[11]さらにJ・P・サルトル等^[12]の哲学の研究によつて、また禅者久松真一^[13]との対話を通して禅仏教への理解を深めることによつて、そしてマルクス経済学の宇野弘蔵^[14]との折衝を通してK・マルクスの『資本論』の研究を深め、またその経済学の方法論（原理論・段階論・現状分析）を学びとることによつて、人間存在の根源的な事実に基づいて成り立ってくる人間の二重性、或いは同じく国家・共同体における相補的な二極性について独自の思索を展開した。そして後期思想は、『競技・芸術・人生』或いは「現代の精神的状況」^[15]（1961年）において、人間存在及び国家・共同体の原理論の一応の完成を待って、人間存在・国家の二重性・二極性のそれぞれの領域における歴史性の解明に、つまり相補的な・相対的に独立な二領域における段階論・現状分析に関する研究に積極的な展開がなされる。大学問題についての発言、^[16]或いは新約学者（八木誠一、田川建三）との対話。日本文化論（西田哲学のそのの批判的継承）、^[17]新興宗教の「晴明教」との対話。^[18]そして『聖書を読む—マタイ福音書講解—』^[19]においてその思想の集大成がなされ、最晩年にあつては包括的な学問の方法論として、「純粹神人学」^[20]を構想する。

滝沢克己は、明治四二年（1909年）栃木県宇都宮市に、長野県の本曾の出身である漆器商人を両親として生まれ、郷里の小学校・中学校を終えて、東京の第一高等学校を出て、東京大学（法学部）を半年で辞め、「哲学」を勉強するために。九州大学（哲学科）に入学し、西洋最先端の哲学を学び卒業する。続いて副手としてその研究室に残り西田哲学の研究に没頭し、

昭和八年（1933年、二十三歳）「哲学の対象」に逢着する。同年ドイツに渡り、翌年ボン大学神学部でカール・バルトに師事し、さらにマールブルク大学神学部でエルドルフ・ブルトマンに学ぶ。帰国して翌年『西田哲学の根本問題』^[21]を刊行。昭和十二年（1937年）より山口高等商業学校にほぼ十年間、そして戦後まもない昭和二十二年（1947年）より九州大学文学部に二十四年余り奉職する。その間昭和三十三年（1958年）、福岡市のキリスト教教会にて受洗。^[22]退官後は、著作活動に専心、またドイツの諸大学へ客員教授として三度招かれる。昭和五十九年（1984年）、渡独の直前に病を得て急逝。享年七十五歳。福岡市の平尾霊園内の社家町教会の墓地に埋葬。

本稿は、滝沢克己の初期思想の形成期について、つまりその哲学の出立点について、論ずる。まず、その幼い日における哲学の根本的な問題に襲われ、しだいに解決をせまられるに至ったこと、次で、西洋最先端の哲学を学ぶも満たされず、ようやく西田哲学に出会い、二年近く専念研究し、その根本的問題の解決を得たこと、つまり人間存在の根源的事実に覚醒したこと、そして最後に、カール・バルトの下でその神学と『新約聖書』の研究を通して、それが同じく人間存在の根源的事実を指し示していることを洞察するも、そのことはカール・バルトのなかなか認めるところとならなかったこと、を論ずることにする。

（二）

周知の如く、自然科学や社会科学では、自然や歴史的社会を対象とし、人間がそれらによって限界づけられ、物的或いは社会的存在として自覚されるところに、それらは科学として成立する。つまり、それらについての思惟が理性的となる。ところが哲学では、自然や歴史的社会が人間を界限づけるといって